

KHR-1を“スコープドッグ”に変える!

装甲騎兵ボトムズ“スコープドッグ” KHR-1 トランスキット

あざ
梓 みきお

誰でもカッコいい&オリジナルのロボットは作ってみたいはず。だが世の中、アルミを板金加工して外装を作ったり、お母さんにアフロを縫ってもらえる人ばかりではない。しかし、この“スコープドッグ”KHR-1 トランスキットを使えば、専用設計された外装が手に入るのだ!



過去の名ロボットを 忠実再現!

本誌の読者は、この緑色をしたロボットを知っているだろうか? 恐らく、今30代以上のロボット好きなら、見ただけでピンと来るはず。逆に言うと、それ以下の年代にはなじみが薄いかも。このロボットは、1983~1984年にかけて放映されたTVアニメ『装甲騎兵ボトムズ』に登場する「スコープドッグ」という機体である。

各部が忠実に再現され.....と続くベタな模型誌みたいだが、ここはロボコンマガジン。スタイルが「スコープドッグ」であることが注目なのは間違いないのだが、何より重要なのは、中身が「KHR-1」だということ。

しかし、これは近藤科学から出た新製品、というわけでもない。外装だけをセットにして、大日本技研から発売された“トランスキット”なのである。

“トランスキット”とは、モデルカーなどの仕様変更をするための追加パーツセットのこと。いわば「よりこだわる」人のためのパーツ群なわけだ。近藤科学純正の外

装「ペーパースーツ」と違い、材質はバキュームフォーム(真空成型)された薄いプラスチックシートが基本構造。頭部カメラや手などはレジン製のキャスト部品となっている。

最近のプラモデルは全部色がついていたりするが、このキットは買っただけでは白一色(写真1)。57点のパーツはすべて色を塗る必要がある。ただ、プラスチックなので普通のプラモデル用カラーが使えるし、アルミに塗装するような難しさはないので苦労はしないだろう。

実物を目の前にしてみても、中身が「KHR-1」だとはなかなか気づかない。唯一、足首のあたりにフレームが覗いているくらいで、ほぼ全身がカバーされているし、プロポーションも違う。

試しにノーマルの「KHR-1」と並べて撮影してみたが.....まったく別物だ(写真2)。重量感というか迫力というか、そもそもロボットの持っている殺気が違う。たとえば『ボトムズ』を知らない人でも「どっちが強そう?」と聞いたら即答で「スコープドッグ」と言うだろう。ロボットの外観、というのはそれくらい印象が大きいのだ。

“スケールモデル” としての仕様

ということで、まずは外観 “スケールモデル”としてのスペックから触れることにしよう。

身長は「KHR-1」とほぼ同じ34cm。“本物”は380cmほどなので、スケールに換算すると1/11となる。プロポーションとしてはいくらかデフォルメされているというが、見た限りではほとんどわからない、ハイレベルな仕上がりがだ(写真3、4)。

製作した大日本技研の田中さんは、二足歩行ロボット関連のパーツはこれが初めて。それでいてこのレベルの仕上がりが得られている背景には、本職ともいえる「架空の銃のモデル化」技術があるだろう。アニメの劇中などに登場する「架空の銃」を立体化したり、モデルガンを組み込んだ可動モデルに仕上げることですでに実績があり、「銃」が「ロボット」に変わっただけで、決まったスタイルの中に、別の形のモノの機能を活かしつつ組み込む、という点は変わらない、というわけだ。

各部の干渉はできる限りないように設計されているし、パーツの分割も、組み立てやすく、なおかつなるべくカッコよく見えるようにしてある。「経験則として、やっぱりカッコよくないと、機能が良くて売れないんですよ」(前出・田中さん)というコメントの通り、できる限りスタイルが優先されている。



写真1
全パーツを並べるとこの分量。「これをきちんと切り離すのが一番苦労するかも」とは田中さんの弁



写真2
並ぶと「厚さ」がかなり違うのがわかる